

書評「人生の親戚」大江健三郎（新潮社），ひびき，No.2，1991

著者大江氏に障害をもつ長男光さんがいることはよく知られている。障害の子どもが登場する作品を数多く発表しているが、この本もそんな一冊。光さんと同じ青鳥養護学校へ通うムーサン（愛称）の母親倉木まり恵さんの周辺を浮き彫りにしながら、主人公K氏の心模様が描かれている。

障害の子供がいようと何ごとにも拘らないまり恵さんは大学の先生。離婚後祖母・母・長男ムーサンの3人暮らし。次男道夫くんは再婚した夫が育てている。心身共に健康だった道夫くんはある日突然中学校のいじめに合い下半身マヒの車椅子生活となってしまう。

元家族の4人は久しぶりに伊豆の別荘で遊ぶのだが、帰京した後2人の子供は示し合わせて家出をし、楽しかった思い出の伊豆の崖から飛身心中をしてしまう。

「下半身の自由を失った道夫が死を敏感に恐がっていたムーさんにどのようにして、死を選ばせるだけのこの世界への怒りと嫌悪を植えつけたのか」を知る術は今はない。知的で奔放でもあるまり恵さんは重い荷物を背負いながら長い長い旅に出、とうとう乳ガンのためにメキシコの小さな村で人々に愛されながら命を終える。

人の身の上におこるさまざまなことのあるものは消去され、あるものは思い出となって残される。悲しい思い出は不要と言っても仕方のないのが人生だ。重厚悲壮なテーマに心を揺さぶられる必読の書。